パスカルの≪アポロジー≫のプラン復元に関して（XXXV）

竹　下　春　日

〔I〕序　論

前回（XXXIV）を以って，パスカルのプラン復元の表を完成したので，今回以後は第Ⅲ回において割愛した作業を，継続し，これを充実することにし度い。ところで第Ⅲ回における論旨について，同回の論述の一部を再掲すると，次の如くである――「≪アポロジー≫のプランを復元するためには，Classé（既分類断章群）における titres に相当するものを，Non classé（未分類断章群）に対して決定せねばならない。Lafuma は Classé の分類タイトルをパスカル自身によるものとなし，これを≪アポロジー≫の≪章≫ chapitre と見做しているが，これは Classé が作製された当時のプランを示すものに過ぎない。われわれは，Non classé 中の最後の断章が書かれた時点における≪アポロジー≫のプランを問題としているのであるから，Classé の諸タイトルをそのまま Non classé のタイトルにかんして謂わばエポケーを行い，これらを括弧のうちに保留したい。したがってわれわれは，われわれ自身独自の方法によって，Non classé の諸タイトルを決定しなければならないのである。この決定に達するための手段の一つが，次に述べる「自然的分類」である。／自然的分類とは，Non classé の全断章を外部から一定の規準を持ち込むことなく，全断章のうちに自然に見出される規準，すなわち諸断章の内容の類似性そのものを唯一の規準とする分類である。これは Brunschvicg がその『パンセ』の全断章に対して行ったことと同じであるが，Brunschvicg の分類は Classé

と Non classé および其の他を含む諸断章を対象としたものであり，したがって Non classé の全断章は，Classé の諸断章と相関的に分類されており，このため前者の分類は後者の分類の影響を多かれ少なかれ受けて居る。したがって Non classé の分類は，Non classé そのものの自からなる分類とは，言い難い。われわれ自身による自然的分類が必要となる所以である。……次にわれわれは，分類がいかにして行われたかを述べてみたい。即ち何故該断章が該分類項目中に配属せしめられたのか，その理由を述べる必要があろう。分類の規準は既述のごとく，断章間の内容上の類似性ないし親近性に存するのであるが，この類似性の判定が最終的には，常識と直観に依存していることは，言う迄もない。多くの諸家は分類の成果たる分類表のみを発表しているが，われわれの言う如き理由説明を行なってはいない。これは学問的手続きとしては，不備であると言わざるをえない。しかし分類表のすべてについて，これを説明することは事実上余裕を持たないので，一例のみを掲げることにする[1)]。」

以上によって，今回に於けるわれわれの研究作業は，当然上出の一例（23 流転性——146(2)，152，206）を除いて，Non classé の全断章を一定項目中に配分しうる理由そのものを，各断章について提示することである。われわれは，この作業を，第Ⅲ回における「自然分類の表」の順序に従って，順次行うことにし度い。

〔Ⅱ〕　1　順序（秩序）——36，42，44，45，46，47，48，49。

上掲の番号1は分類項目の順序を指すものであり，「順序（秩序）」は分類項目の名称である。而して以下の番号は，Non classé 中に所属する断章（fr.）の番号（Lafuma によって附与された番号）である。

(1)　La. 36-Br. 241[2)]. ——この断章が，「順序（秩序）」なる分類項目中に所属すべき fr.（断章）であることは，明らかである。何故なら同断章の文頭には，≪順序（秩序）≫（Ordre）というタイトルが附与されているからである。

(2) La. 42-Br. 449. ——この fr. にも同様のタイトルが存するので，「順序（秩序）」のうちに入ることになる。

(3) La. 44-Br. 373. ——この断章内容は，次の如くである——≪ピュロン派——わたしはここではわたしの考えを無秩序に書いて行こう。だが，もちろん，無計画な混乱状態のままに書いて行くというわけではない。これが真の秩序なのである。まさに，無秩序そのものによって，つねにわたしの対象を明らかにしてくれる真の秩序なのである。／わたしが秩序正しく，ピュロン派のことを論じるとすれば，わたしは自分の主題に不当な敬意を払いすぎるということになろう。わたしは，ピュロン派には秩序がありえないことを，示したいのだからである。≫（*Pyrrhonisme.* ——J' écrirai ici mes pensées sans ordre, et non pas peut-être dans une confusion sans dessein: c'est le véritable ordre, et qui manquera toujours mon objet par le désordre même. /Je ferais trop d'honneur à mon sujet si je le traitais avec ordre, puisque je veux montrer qu'il en est incapable.）この断章全体の文意から言って，≪*Pyrrhonisme*≫と≪ordre≫が主題となっているのは，自ずから明らかであるが，この事は≪ordre≫の語が3個，この反対概念に相当する≪désordre≫，≪conofusion≫が，それぞれ1個使用されている事実によっても，理解されうるところである。それゆえ，この fr. は「順序（秩序）」の項目に属する。

(4) La. 45-Br. 21, La. 46-Br. 20, La. 47-61. ——この三断章はすべて，≪ordre≫のタイトルがあるので，当然「順序（秩序）」の項目に入る。

(5) La. 48-Br. 62. ——この fr. の最初の部分を引用すると，次の如くである——≪第一部の序——自分を知ることについて論じた人々のことを述べること。つくづく嫌な・うんざりした気持を起こさせるあのシャロンの分類について，モンテーニュの混乱について述べること。モンテーニュは，直線的方法

の欠陥をよく知っていたので，次々に話題をかえて行くことによって，その欠陥を避けた。かれは，しゃれたやり方を試みようとしたのだ。……≫ (*Préface de la première partie.*——Parler de ceux qui ont traité de la connaissance de soi-même; des divisions de Charron, qui attristent et ennuient; de la confusion de Montaigne; qu'il avait bien senti le défaut [d'une droite] méthode, qu'il l'évitait en sautant de sujet en sujet, qu'il cherchait le bon air.……) この文章中には，≪分類≫ (division)・≪混乱≫ (confusion)・≪方法≫ (méthode) というような意味内容上≪ordre≫ と関係を有する語が出て来るのみならず，この断章の部分は，前出の fr. (La. 44-Br. 373) の内容と，その主旨を等しくするものである。つまり，La. 44 中の≪わたしはここではわたしの考えを無秩序に書いて行こう。だが，もちろん，無計画な混乱状態のままに書いて行くというわけではない。これが真の秩序なのである。まさに，無秩序そのものによって，つねにわたしの対象を明らかにしてくれる真の秩序なのである。≫というパスカルのレトリックは，La. 48中の≪モンテーニュの混乱≫及びモンテーニュの≪しやれたやり方≫を評価するパスカルの態度と，一致するものである。したがって，今われわれが扱っている当の断章 (La. 48) は，La. 44 の所属すべき分類項目「順序（秩序)」中に，当然入るべきものである。

(6) La. 49-Br. 242. ——この fr. の文頭は，≪第二部の序——この問題について論じた人々のことを述べること。≫ (*Préface de la seconde partie;* Parler de ceux qui ont traité de cette matière.) となっている。この文中の≪この問題≫ (cette matière) とは，＜神の存在＞に関する問題のことであるが，文頭の≪第二部の序≫は，既出の断章 La. 48-Br. 62の文頭——≪第一部の序≫に対応するものであることは，明瞭である。即ち≪第一部≫ (la première partie) ——≪第二部≫ (la seconde partie) の≪ordre≫が，歴然と示されている以上，両断章が「順序（秩序)」の分類項目中に所属することは，言う迄もないところである。

〔Ⅲ〕 2 人間の空しさ（虚栄心）——90, 91, 93(3), 94, 95, 96, 126(4), 146(23), 160(9), 169, 199.

(1) La. 90-Br. 162. ——この断章の書き出しは，≪人間の空しさを，底の底まで知りつくしたいと思う人は，恋愛の原因と結果を，じっくりと観察してみるだけでよい。≫ (Qui voudra connaître à plein la vanité de l'homme n'a qu'à considérer les causes et les effets de l'amour.) というものである。この文章は，断章全体の一部であるが，全体の要旨を述べたものである。そうしてこの文のテーマは，≪人間の空しさ≫ (La vanité de l'homme) であるから，同名の分類項目に属することは，言う迄もない。

(2) La. 91-Br. 404. ——この断章の主旨とするところは，次の文章のうちに見出される——≪人間は，人間の理性を何より尊重しておりそのため，この地上でどんなに卓越した地位を手に入れたとしても，人間の理性においても同じくすぐれた地位にまつり上げられないかぎり，満足しようとしない。それが，この世におけるもっともすばらしい地位であって，この地位を求める人間の願いをそらせることは，何をもっても不可能である。この性向を人間の心から消し去ることは，絶対にできない。≫ (Il [l'homme] estime si grande la raison de l'homme, que, quelque avantage qu'il ait sur la terre, s'il n'est placé avantageusement aussi dans la raison de l'homme, il n'est pas content.) この文意全体から見て，「人間の虚栄心（空しさ）」を主題とするものであることは，明らかである。

(3) La. 93(3)-Br. 153. ——この断章のタイトルは，≪一しよにいる人たちから尊敬を受けたいという欲望について——≫ (Du désir d'être estimé de ceux avec qui on est. ——) というのであるが，これは人間の≪虚栄心≫ (la vanité) の実例に外かならない。しかもこの fr. の末尾には，≪空しいもの．——賭けごと，狩猟，訪問，演劇，いかにも永続きしそうな名声。≫

(Vanité: jeu, chasse, visite, comédies, fausse perpétuité de nom.) という叙述が見られる。以上二つの理由から，この断章が「人間の空しさ（虚栄心)」の項目に入ると，言い得るであろう。しかし他方において，この fr. のタイトルは，人間の≪自愛心≫（l'amour-propre）をテーマとするとも考えられるので，この断章を分類項目3の「自愛心」に配したのである。

(4) La. 94-Br. 150. ——≪虚栄心というものは，人間の心の中に深く錨をおろしているので，……≫（La vanité est si ancrée dans le coeur de l'homme, que……）というのが，この断章の書き出しであるが，≪la vanité≫という語があるので，「人間の空しさ（虚栄心)」に属することは，自ずから明らかである。

(5) La. 95-Br. 333. ——この断章の前半には，次のようである——≪あなたがたは，こんな人々に出くわしたことはないだろうか。あなたがたがあまり敬意を払わないので，それが不満で，身分の高い人々の中でも自分を重んじて下さるこんなかたがたがあるなどと言い立ててくる人々である。≫（N'avez-vous jamais vu des gens qui, pour se plaindre du peu d'état que vous faites d'eux, vous étalent l'exemple de gens de condition qui les estiment?）この文章は，人々によって尊敬された度いという人間の≪虚栄心≫に関するものであるから，同名の分類項目に入ることになる。

(6) La. 96-Br. 401. ——この断章のタイトルは，≪名誉≫（Gloire）というものであり，その内容は≪けだもの≫（les bêtes）より人間の方が，名誉心に富んでいるという主旨のものである。即ちこの fr. は，≪名誉≫に囚われ易い人間の心——≪虚栄心≫を，本質上対象とするものである。それゆえ「人間の虚栄心（空しさ)」の項目に分類しうると，言いうるのである。

(7) La. 126(4)-Br. 174. ——この断章タイトルは，≪惨めさ≫（Misère）

であるから，われわれの分類項目4の「惨めさ」に当然入るものであるが，「人間の空しさ（虚栄心）」の項目中に分類しうる根拠は，この fr. 中には≪ソロモンとヨブは，人間の惨めさをだれよりもよく知り，だれよりもよく語った人である。……一人〔一方の人〕は経験によって快楽の空しさを知り，もう一人の方は，災の存在を知った。≫ (Salomon et Job ont le mieux connu et le mieux parle de la misère de l'homme, ……; l'un connaissant la vanité des plaisirs par expérience, l'autre la réalité des maux.) という叙述が存し，そうしてこの文中には，≪快楽の空しさ≫ (la vanité des plaisirs) が語られているからである。

(8) La. 146 (23)-Br. 372. ——われわれは既出の〔I〕序論において，「……しかし分類表のすべてについて，これを説明することは事実上余裕を持たないので，一例のみを掲げることにする。」と述べているが，この断章こそは，第Ⅲ回で分類項目中に配せられうる理由が，「一例のみ」として開陳された当の断章であるが，再録の煩を厭わず掲示すれば，次の如くである——「23の「流転性」には146(2)，152，206の三個の断章が分類されている。諸断章の内容は，次のようである。／≪私の考えを書きとめている途中で，それがときたま逃げてしまうことがある。だがこのことは，つい忘れがちな，私の弱さというものを思いおこさせてくれる。これは，私の忘れ去った考えに劣らず，私にとって教訓的である。なぜなら，私にとっては，自分の無を知ることだけが大事であるからである。≫ (La. 146-Br. 372)；≪流転。持っているものがみな流れ去ってしまうのを感じるのは，恐ろしいことだ。≫ (La. 152-Br. 212)；≪時は，苦しみや争いを癒やす。なぜなら人は変わるからである。もはや同じ人間ではない。侮辱した人も，侮辱された人も，もはや彼ら自身ではないのである。それはちょうど，かつて怒らせた国民を，二世代たって再び見るようなものである。彼らは依然としてフランス人ではあるが，しかし同じフランス人ではない。≫ (La. 206-Br. 122) ／筆者がこの三個の断章を「流転性」という分類項名に一括したのは，La. 206 ではこの断章の主旨が時の変化について語るもの

だからであり，La. 152 は≪流転性≫という言葉が見られるからである。そうして最初の La. 146 (2) 中には≪私の弱さというものを思い……≫とか，≪私の無を知ることだけが大事である……≫等の言葉が見られるところから，この断章を2の「人間の空しさ」のうちにも分類しうることは，容易にこれを理解しえよう。ところでこの断章中の≪私の考えがときたま逃げてしまう≫ことや，≪私の忘れ去った考え≫という言葉は，内容上 fr. 152 の≪流転。持っているものがみな流れ去って云々≫の一つの場合と見られるから，この断章を23の「流転性」のうちにも分類したのである。」

(9) La. 160(9)-Br. 131. ——この fr. の全文は，次の如くである——≪退屈——情熱もなく，仕事もなく，楽しみもなく，精神の集中もなく，完全な休息状態にあるほど，人間にとっては耐えられないことはない。その時，人間は，自分の虚無，自分の見捨てられたさま，自分の足りなさ，自分の頼りなさ，自分の無力，自分の空虚をひしと感じる。たちまち，人間のたましいの奥底から，退屈，憂い，悲しみ，悩み，怨み，絶望が湧き出てくるであろう。≫ (*Ennui.* ——Rien n'est si insupportable à l'homme que d'être dans un plein repos, sans passions, sans affaire, sans divertissement, sans application. Il sent alors son néant, son abandon, son insuffisance, sa dépendance, son impuissance, son vide. Incontinent, il sortira du fond de son âme l'ennui, la noirceur, la tristesse, le chagrin, le dépit, le désespoir.) この断章中の諸表現——≪虚無≫ (néant)・≪見捨てられたさま≫ (abandon)・≪足りなさ≫ (insuffisance)・≪頼りなさ≫ (dépendance)・≪無力≫ (impuissance)・≪空虚≫ (vide) は，人間の空しさの諸様相を示しており，また≪退屈≫ (l'ennui)・≪憂い≫ (la noirceur)・≪悲しみ≫ (la tristesse)・≪悩み≫ (le chagrin)・≪怨み≫ (le dépit)・≪絶望≫ (le désespoir) の語は，人間存在の空虚がもたらす主観的感情の諸形態を示している。それ故この断章 (La. 160) が，「人間の空しさ」に分類されうることは，明らかである。然しこの断章のタイトルは，≪退屈≫ (Ennui) であ

るから，当然9の分類項目（「退屈」）にも，入りうることが，推定されるのである。

(10) La. 169-Br. 147. ——≪わたしたちは，自分が固有に持つ生活，本来のあるがままの自分においてする生活に満足しない。つまり，他の人の観念の中で，一つの架空の生活をいとなむことを望み，そのために見せかけばかりに熱中する。わたしたちはたえず架空の自分自身を美しくよそおい，それを保持することに汲々とし，真の自分をなおざりにする。そして，自分に落ち着きとか寛大な心とかがある時には，何とかそれを人に知ってもらおうと一生懸命になり，そうした徳を架空の自分の方に結びつける。むしろ，本当の自分からそれらを引き離しても，架空の自分の方にくっつけようとする。勇敢な人だという評判を得るためなら，よろこんで卑怯者にもなりかねない。架空の自分がなければ，本当の自分に満足できず，しばしば架空のものと本当のものとを取り換えようとするとは，本来のわたしたち自身が無にひとしい存在であることの大きい証拠ではないか。つまり，自分の名誉をたもつために死なないような者は，恥知らずになるのだからである。≫（Nous ne nous contentons pas de la vie que nous avons en nous et en notre propre être: nous voulons vivre dans l'idée des autres d'une vie imaginaire, et nous nous efforçons pour cela de paraître. Nous travaillons incessamment à embellir et conserver notre être imaginaire et négligeons le véritable. Et si nous avons ou la traquillité, ou la générosité, ou la fidélité, nous nous empressons de le faire savoir, afin d'attacher ces vertus-là à notre autre être, et les détacherions plutôt de nous pour les joindre à l'autre; nous serons de bon coeur poltrons pour en acquérir la réputation d'être vaillants. Grande marque du néant de notre propre être, de n'être pas satisfait de l'un sans l'autre, et d'échanger souvent l'un pour l'autre! Car qui ne mourrait pour conserver son honneur, celui-là serait infâme.）この fr. の前半を通読しただけでも，われ

われはこの文章の主旨が，人間の「虚栄心」を説くものであることが，容易に理解されるであろう。例えば，≪わたしたちはたえず架空の自分自身を美しくよそおい，それを保持することに汲々とし，真の自分をなおざりにする。≫ (Nous travaillons incessamment à embellir et conserver notre être imaginaire et négligeons le véritable.) という叙述が，そうである。而して≪本来のわたしたち自身が無にひとしい存在であることの大きい証拠≫ (Grande marque du néant de notre propre être) という語句は，人間存在の「空しさ」を明瞭に示すものであるから，この fr. (La. 169) は，当然分項目2の「人間の空しさ（虚栄心）」に属する。

(10) La. 199-Br. 452. ——≪不幸な人々に同情するのは，この世の欲情に反したことではない。それどころか，こんなふうに友愛の証拠をみせ，まったくふところをいためないで，やさしい人だという評判をかちうることができるのは，なかなか結構なことである。≫ (Plaindre les malheureux n'est pas contre la concupiscence. Au contraire, on est bien aise d'avoir à rendre ce témoignage d'amitié et à s'attirer la réputation de tendresse, sans rien donner.)

この断章全体の文意から推して，人間の「虚栄心」の一例としての名声に対する人間の欲望が，語られていることは，容易に理解することが出来よう。それゆえ，この fr. は当然乍ら「人間の空しさ（虚栄心）」の分類項目に入ることになる。

＜補遺と訂正＞

(1) 拙論第Ⅲ回において，分類項2の「人間の空しさ」を，「人間の空しさ（虚栄心）」とする。

(2) La. 91-Br. 404 について。——われわれは，拙論Ⅲ回において，この断章を本文において述べた如く，分類項目2の「人間の空しさ（虚栄心）」に分類したのであるが，この fr. のうちには，人間の≪理性≫・≪地位≫に対す

る執着心の強さも説かれているので，われわれはこの断章を，分類項目の「3自愛心」のうちにも配分する。したがって，「2人間の空しさ」中の91は，91(3)とし，「3自愛心」の項目中に，91(2)を挿入する。

(3) La. 95-Br. 333 について。——この fr. も，≪敬意≫（état）を払って貰い度い人間の一般的傾向に関するものであるから，「3自愛心」のうちに所属せしめる。それゆえ「2人間の空しさ（虚栄心）」中の95は95(3) とし，「3自愛心」のうちには，95(2)を加えることにする。

(4) La. 96-Br. 401 について。——この断章は，≪名誉≫を追求する人の心を述べたものであるが，これは≪虚栄心≫と表裏を為す≪自愛心≫（l'amour-propre）にかんする叙述とも考えうるので，この断章を La. 91, La. 95 と同様，「3自愛心」の分類項目中に配することにする。したがって，「2人間の空しさ（虚栄心）」中の96は96(3)とし，「3自愛心」の項目中には，96(2)を附加する必要がある。

注

1) 駒大外国文学研究，第6号，拙論「パスカルの≪アポロジー≫のプラン復元に関して」（Ⅲ），p. 95—101参照。なお原文は，Blaise Pascal, Pensées sur la Religion et sur quelques autres sujets, Avant-propos et notes de Louis Lafuma, Edition intégral, Troisième édition, 1960に拠り，訳文はⅢ回中の訳文を除いて，田辺保訳（新教出版社版）に拠る。

2) Br. 241は，Léon Brunschvicg による分類番号である（以下同様）。

（XXXV 回了）